

アコと人生…この人にインタビュー《第9回=その1=》「中村 健さん」

今回紹介するのは、昨年「第 21 回関東アコーディオン演奏交流会（独奏部門）」《シニアの部》に出演され“敬老賞”になられた方です。88歳（傘寿）での出場でした。ご高齢でもあり長野にお住まいのため、自己紹介を兼ねて音楽、アコーディオンとの関わりなどについて寄稿していただきました。かけがえの無い家族や多くの親友を戦争で失った時代を生きてきた人生の大先輩です、原稿には若い方へのメッセージも込められているので数回に分けて紹介いたします。



■私は 1921 年（大正 10 年）8 月 17 日、東京市小石川区大塚（現、文京区大塚）で生まれ 88 歳というおめでたい歳になってしまいました。

（写真は昨年シニアの部に出場したときのスナップ）

両親は長唄、新内、三味線など和風の趣味でしたが、叔母や叔父（父の妹、弟）は洋風の音楽が趣味で、年中洋風の歌を聴かされていました。

私より二つ年上の兄は、旧制中学生の頃からバッハやモーツァルト、ベートーベンの音楽に造詣が深く、中学時代に「18 世紀初期の音楽について」と題した論文が両親の仏壇の中から出てきました。この兄も戦争で 26 歳の若さで若い妻や 1 歳の女の子を残して中国大陸で戦死して帰らぬ人となってしまいました。《中学の頃の親友》

私の中学時代の同級生に草川宏君という親しい友人がおりました。彼は 1 年浪人して上野の音楽学校（現、東京芸術大学）に入学しました。彼の父親は草川信という「夕焼け小焼け」、「ゆりかごの歌」、「どこかで春が」などの童謡で知られる有名な作曲家です。

彼と私の兄は音楽を通じて親交を深めておりましたが、二人ともあの忌まわしい戦争で若い有望な命を失ってしまいました。彼は昭和 20 年 6 月（終戦の 2 ヶ月前）、太平洋上でアメリカ海軍潜水艦の魚雷攻撃を受けて輸送船共々海深く沈んだまま帰らぬ人となってし

まいました。前途有望な 23 歳の若さでした。《草川君の影響を受ける》

私と草川宏君は、いつも音楽の時間に教室の一番前の座席に座って先生と一緒に個人指導のような形で授業を受けていました。他の生徒たちはまるで遊び時間のようにワイワイ、ガヤガヤと自由勝手に行動していました。

私も草川君の影響を受けて音楽学校に進学したいと父に相談しました。ところが父は自分が理科系出身のせい絶対反対で許してもらえず、兄と同じ高等農林学校へ進学することにしました。（父の言うことを聞いたおかげで戦争の被害を免れて今日健在でアコーディオンを楽しんでいる次第です。）

《物心のついた大正の終わりから昭和の初めにかけての日本は、今思うと暗黒時代の幕開けのように思われました。》

昭和の初め頃治安維持法が発令されて、学生はもちろん一般の人々の自由な政治活動や思想の自由は禁止され、暗い世の中を迎える時代になってきました。

また、この頃（大正 14 年 4 月）旧制の中学校に陸軍の現役将校（若い軍人）が配属されて若い子どもたちに軍事教練という厳格な教育を行うようになりました。

一方、中国では中国人と日本の陸戦隊が戦闘を交えるなど、日本の大陸への侵略が始まりました。またこの頃（昭和 3 年）共産党への全国的弾圧が始まり 1600 人近い人々が検挙されました。

《思想傾向の矯正が始まる》

一方文部省では学生、生徒の思想傾向の矯正、国民精神の高揚を目指して一方的に軍の方針に沿って動いておりました。この頃も日本軍は中国の国民政府軍と衝突し戦闘を続けておりました。また、この年（昭和 3 年）戦争を憂慮

したり反対したりする国民を徹底的に取り締まる特高警察が全国の警察署に設置され、思想の弾圧が始まりました。また文部省には思想問題に対処するため学生課が設置され(翌年学生部に昇格)学生思想の取り締まりは一層強化されるようになって来ました。

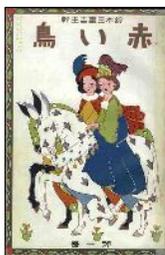
そして昭和4年には共産党員の全国的大検挙が行われ400人近い党員が起訴されました。また、当時国民から一番恐ろしい存在として知られていた憲兵司令部が思想研究班を編成し、戦争を批判したり戦争についての論説を徹底的に取り締まる方策を打ち出しました。

(次号に続く)

■この手記を読むときの参考になればと中村さんが生まれた大正10年頃～昭和初期の様子を少し調べてみました。

●1918年(大正7年)

鈴木三重吉主宰「赤い鳥」創刊、児童作文を募集、北原白秋が選者になる。写真の出典：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』



●1921年(大正10年)

神戸三井造船、川崎造船の労働者35,000人のデモ行進(7月)“デモ禁止令”が出され神戸市の要請で軍隊が出動、死者まで出た。

創刊号表紙

●1922年(大正11年)

「一粒で300メートルの滋養菓子」“グリコ”が発売された。発売当初は箱の中にカラーカードが入っていた。グリコーゲンのほかにカルシウム、ビタミン、その後チョコレートをいれて味を改良し全国的に売れ出した。



(出典：江崎グリコホームページより)

●アインシュタイン来日(11月17日神戸に着)翌18日東京で講演、その後京都、大阪、仙台でも講演し大歓迎を受けた。

●1923年(大正12年)関東大震災発生

●作家の菊池寛が月刊誌「文芸春秋」を創刊。定価10銭は、かけそば、かけうどんと同じで他の雑誌(1円程度)に比べて安かった。

●1925年(大正14年)3月22日午前9時30

分「JOAK」のアナウンスで、東京芝浦の仮放送局からラジオ放送が始まった。(本放送は愛宕山から7月12日に開始)続いて名古屋放送局、大阪放送局が開設している。

●4月22日、【治安維持法公布】

普通選挙法の成立と抱き合わせに成立。結社及び運動を禁止し、違反者には懲役10年以下の刑を定めた。(5月12日施行)この法律は後に民衆運動ばかりか議会政治をも危機に追い込んでいく。

●【軍事教練始まる】

全国の中学校以上の学校で男子生徒、学生に対する軍事教練の実施が決まる。陸軍の現役将校2000人が配属された。予備兵力養成と共に、軍縮による失業将校の救済策でもあった。

●【ロイドメガネ】

大正から昭和の初めにかけて流行したも



のに“ロイドメガネ”がある。写真のようなメガネでフレームはセルロイド製。米国の俳優「ハロルド・ロイド氏が掛けていたことで人気になった」

●【当時流行した唄】

アラビアの唄(Sing Me Song of Araby)

♪ 砂漠に日が落ちて 夜となる頃…



※年号が大正から昭和に改まった頃、欧米のジャズソングに日本語歌詞をつけて歌うことがブームになり「バレンシア」、「私の青空」が流行した。「アラビアの唄」もそうした歌のひとつ。訳詞をした堀内敬三氏が1923年マサチューセッツ工科大学大学院を修了し1926年に帰国するとき持ち帰った楽譜のなかの一つだった。日本放送協会の囑託となり、浅草で活躍していた喜劇俳優二村定一に歌わせたところ大きな反響があり「私の青空」との組み合わせでコロムビア、ピクターの2社からレコードが発売され、たちまち両社合わせて20数万枚という破天荒な大ヒットになった。(出典：ハンドブック世界の愛唱歌、長田暁二著 / ヤマハミュージック出版より)

《文責：乙津》